
宇宙の墓標ーソロモン会戦記ー

浅倉かける

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宇宙の墓標―ソロモン会戦記―

【Nコード】

N2711U

【作者名】

浅倉かける

【あらすじ】

【現在晒し中】

戦場に英雄は要らない

あるのは生きるか死ぬかだけ

ひたすら熱く

ひたすら激しく

ひたすら悲しく

戦士達は闘い、散っていく

後にジオン独立戦争最大の激戦と呼ばれる事になるソロモン攻略戦

その巨大すぎる墓標に漂う英霊達の物語

簡単に言うならドズル無双(笑)

設定はオリジン版に準拠します。と言いたい所ですが都合の良い所だけつまみ食いしていきます。

ちなみにチートなんかありません。ただひたすら重く激しく熱く悲しく戦争しています

第1話―ソロモン海域波高し

「連邦の新兵器だと？」

宇宙要塞ソロモンの指令室でジオン公国宇宙攻撃軍指令ドズル・ザビ中將は報告をもつてきた一情報士官を見やった

「はっ！天頂方面を偵察中の哨戒巡洋艦グラフ・スーパーより先刻連絡があり、おそらくは隠密中任務中の敵輸送艦隊を発見、それを追尾した所大量の巨大な鏡の様な物を発見と報告が来ております。

―
指令室内がざわついた、彼らが等しく連想したのは巨大かつ大量の鏡を使用した光学兵器

戦前であれば子供の妄想として一笑に伏される物であるが、それが強力な殺戮兵器となり得る事を彼らが理解したのは公国軍総帥ギレン・ザビの名で発令されたある技術研究の結果を彼らが知っていたからである。

「ソーラ・レイ構想か・・・現在我が軍において進行中のコロニーレーザー計画と比べ戦略・戦術的な甘みの小さいが故破棄した計画をよもや連邦が実行に移すとは奴ら是が非でもこの戦争に勝ちたいらしいな」

ドズルの疑問も当然である。ジオンの研究では兵器として見た場合、連射が効かない故兵器としては運用が非常に難しく設置する手間とその防衛に割かなければならない戦力とを考えるとその破壊力は確かに魅力ではあるが実戦兵器としてとても使えるものではないと言っ結論だった。

「閣下、小官が思うにこれは恐らく噂される連邦による当要塞への

攻略作戦においた奇襲的效果を狙って設置された物と思われず。我が軍の定期哨戒の範囲外である天頂方面に設置されたと言う事実を見ても間違い無いかと思われず。」

「小官も参謀長の意見に賛同いたします。」

参謀長グリューネマン小将と要塞事務総監アルトリンゲン大佐が各の意見を言つと指令室内で活発な意見が交わされ始めた

敵の新兵器、この場合は決戦兵器が早期に発見された場合これを速やかに叩くのは軍事上の常道であるが連邦軍による侵攻が懸念される現情勢上にあつては、これを叩くのは敵に警戒されるだけでは無いかとの意見が大半を占めた

ならばあえて敵を泳がせ奇襲もしくは強襲に乗つたふりをして大挙して侵攻してきたソレを一網打尽にし反攻の意図を挫いた方がそれ以後の戦争を優位に戦えるのでは無いかとの意見がグリューネマン小将より出されると司令部の方針は決まつた

純軍事的に見て余りにも投機性の強い危険なその意見が通つたのは司令官の人となりが多分に影響しているだろう。彼らは連邦、ジオンの双方を通じて最も高潔で剛胆な勇者の集団だつた。忌避されるは懦弱と怯墮であり賞賛されるは勇氣と高潔であつた

「宇宙攻撃軍に臆病者と弱者はいない！諸君らの言や好し、来たるここソロモンでの連邦との戦いこそ我等宇宙攻撃軍にとつての決戦となろう、完勝を期す為関係各部はこれより作戦準備を行いたし！本職は諸君等の勇氣と忠誠に感謝する。掴むべきは勝利である。ジオクジオン！」

そう締めくくつたドズルに呼応して一斉にジオクジオンの声が拳がる。ドズル・ザビ中將は兄であるギレン・ザビとはまた違った意味で扇動者としての才能があつた、彼の言葉で兵は奮いたち喜んで死地

に飛び込んでいくのである

- ・ 司令室から響くジークジオンの声はやがて要塞全体を多いつくし決戦のその時まで士気を保ちやがて連邦の大軍をも飲みこんでいく・

第2話―男達の思惑

ここで宇宙要塞ソロモンについて説明しておこう

このジオン公国の誇る難攻不落の宇宙要塞はジオン独立戦争開戦に先立ち資源採取用に小惑星帯より運ばれた最大直径10キロ弱の小惑星を改造した宇宙基地である。

竣工の完成は本年6月と既に戦いの中心は地上に移行した後にはなつたがドズル・ザビ中将率いる宇宙攻撃軍の一大拠点として重要な施設となっている

八つの宇宙港を供える港湾施設には宇宙攻撃軍に属する8個艦隊全てを収納してまだ余裕があり要塞その物も三つの独立した施設が互いを有機的に防御する事で破壊ないし占領その物を困難にしている

またドロス型宇宙空母ドロワがドズル直率として配備されており防衛時においても有機的な機動戦闘を行うのが可能の為その柔軟性は極めて高い。またモビルスーツも八個艦隊の全て艦載機体及び要塞周辺の哨戒拠点各所、要塞直轄モビルスーツ隊、ドロワの艦載機の全てを総計すれば1000機は下らなく内部に農業プラント、工業プラントを有する為持久戦においても全く隙の無いこの要塞をUC79年現在正面から陥落させる手段など存在しないと思われていた

事実その厚い岩壁は核兵器の直撃さえ耐え戦艦のメガ粒子砲をもつてしても傷付けるのは容易な事ではない

要塞守兵は言う

「ジオンの要は我らにあり」と

宇宙攻撃軍の指揮を取る為多忙なドズル中将を補佐するべくソロモ

ン要塞には幾人かの総監がいる。

その内の一人、ソロモン要塞機動防衛総監リュッケ大佐はこの年32歳、古くからからのモビルスーツ乗りで開戦前にはダイクン派によるテロ活動を首都防衛師団に一員として阻止し、開戦してからも一週間戦争とそれに続くルウム会戦と常に最前線で闘ってきた歴戦の勇士だ

第一次地球降下作戦時の降下部隊護衛において負傷し前線勤務を退いたが、なをモビルスーツの操縦技量はジオン屈指である。

ソロモン要塞所属のモビルスーツパイロット達の中でナンバーワンは誰かと訪ねられたらドズル中将護衛隊のシン・マツナガ大尉、302哨戒中隊のアナベル・ガトー大尉らと並んで名前が出る位その技量は抜きん出ている

負傷さえなければかの赤い彗星シャア・アズナブル大佐にすら匹敵しただろうと人は言う

最も本人はそういった外部の評判にははなはだ無頓着でありただひたすらに要塞機動防衛総監たる自己の職務に邁進している

剛胆という言葉が似合う彼をして今回のモビルスーツ依る機動防衛計画を過不足なく立案するのは困難であった。

ルナツー周辺を監視している偵察部隊と本国からの情報を示し合わずと今作戦における連邦軍の戦力規模は戦闘艦艇だけで300隻以上、モビルスーツにいたっては2500機ないし3000機程度

「膨大な数だな・・・」

思わず嘆息してしまう。単純な戦力比で言つと3：1

ランチャスター法則を持ち出すも無くあるのは「壊滅」の二文字だ

けである。

「しかし防衛総監、練度や士気の面では我らが勝ってるのでは無いでしょうか？昨日今日モビルスーツに乗り始めた輩など我らの敵ではありません！」

副官のザルツ小尉が言う

「勇ましいな小尉。確かに単純な練度では我らが勝っていよう。だがな小尉、奴らのモビルスーツは教育型のコンピュータを搭載しているらしい。これがどういう事か分かるか？」

「いえ・・・分かりかねます」

「まあ簡単に言えば熟練パイロットと一緒に搭乗してくれてる様な物だな。例えばパイロットが新兵だとしても相手の動きは熟練のそれと同じと言う事だ」

ザルツ小尉が息を飲むのが分かる
ジオンのモビルスーツには教育型のコンピューターなど搭載されていない

戦闘補助プログラムは存在するがそれはあくまで補助であって戦闘力その物はパイロットも技量に依存する

例え最新型の高性能機に乗せた所でパイロットが新兵ならその機体は満足な戦力にはならないであろう

翻って連邦はどうか？

答えは単純で明快だ

最低限の教育さえしていれば全てが熟練パイロットとなる

「しかもだ、その連邦の教育型コンピューターの基本プログラムはあの白い奴のデータらしい」

「ガンダム・・・」

ジオンのパイロットなら等しく皆が恐れている連邦製のモビルスーツ名をザルツ小尉は出したきり押し黙った。

RX78-2ガンダムⅠ通称「連邦の白い悪魔」

潜入作戦中だった当時少佐のシャア・アズナブル率いる部隊を翻弄し地球降下以後は北米攻撃軍司令ガルマ・ザビ大佐を戦死に追いやり、青い巨星ランバ・ラル大尉、さらには突撃機動軍においてその名をさせた第7師団MS大隊付き特務小隊Ⅰ通称黒い三連星Ⅰ等の名だたるパイロットを戦死せしめたそのモビルスーツはジオン将兵にとって恐怖の的になっていた。

「厄介な事が分かったか？極端な話だが我々は推定3000機前後の白い悪魔と闘わなければならんだよ・・・まあ相手の力量その物は大した事ないし戦闘行動に慣れていない、だがそれを考慮しても個々の力量はよくて互角と言った所だろうな。」

「ならば我々はどうしたら良いのですか??」

ザルツ小尉の声は悲鳴に近かった

「単純な話だ、こつちも数を揃える。力量が互角なら数が多い方が勝つ、簡単な引き算だな」

「援軍を乞うのでありますか?」

「小尉、貴官の言いたい事は分かる。本国でのうのうとしてる宇宙モグラ共や見た目ばかりが立派なキシリア少将のお飾り部隊の力を乞うなど我らの誇りが許さないと云うのだろう。」

「はい・・・我ら宇宙攻撃軍はジオン最強の集団であります。我らだけでもやれます。」

「我々がジオン最強の集団なのは間違いない、がしかし寡兵をもって大兵力を相手するのは愚かな事だよ。戦略の基本はまずは相手より強大な兵力を揃える事である。まあ今頃司令部でもそう言った話が出てるだろうな、戦争とはつまりそういう事なんだよ。」

ザルツ小尉もリュツケ大佐の言った戦略の基本は理解している。寡兵で大軍を破るのは一見華麗ではあるが相手より寡兵である時点で戦略的には敗北なのである。戦術的勝利よりも重要なのは戦略勝利、軍人なら皆が理解している。ただ此迄常に最前線で闘ってきた己のプライドが許さないだけだ

だが果たして本国はそれを理解しているのだろうか？
両者の一番の不安もそこにある

「まあとにかくだ、勝たなければ意味がない。その為に頭を下げるくらいなら安い物ではないか？」

そう勝たなければならぬ・・・スペースノイドの為に祖国の為に、それが軍人の職務なのだから。

援軍が必要

そう考えたのは無論リュツケ大佐だけでは無かった
作戦指導を行うべき司令部の高級士官皆に共通した思いであった。

「閣下、それで本国からはなんと？」

ドズルの執務室で問いかけたのは宇宙軍参謀長のグリューネマン少
将であった。

「参謀長それが・・・」

そう返事したのはドズルの副官ラコック大佐である、宇宙攻撃軍で
一番の頭腦の持ち主とも言われ公私においてドズルの信頼が厚い有
能無二な男である、その男の顔色が悪い

続く言葉はグリューネマンの想像以上に悪い知らせだった

。援軍は僅かにモビルアーマー1機、しかも完成したばかりの試作
品だ

新兵器と言えは聞こえはいい、だがその実体は運用テストすら行っ
ていない。それでどう戦えと言うのだ！

「本国は我々を見捨てる気が・・・馬鹿な！」

「口を慎め少将、上層部からの指示に対し馬鹿と言うのは、軍人にあるまじき行為だぞ」

発言したのはドズルである。ドズルのこの発言は堅いと思われがちであるが、グリューネマンはドズルのこう言ったところが嫌いではなかった

軍人は口を出さずただ戦うのみ、何かと理屈っぽい突撃機動軍の連中に聞かせたい言葉である。

「はっ失礼しました閣下。しかしこのままでは我々には勝ち目がありません。」

「分からんぞ？俺がこのビッグザムとか言うので暴れ回れば一個艦隊位は道連れに出来るかも知れんぞ」

悪戯っぽい笑みを浮かべてドズルが言う。ドズルの力量とビッグザムの性能を考慮すれば出来ない話ではあるまい。だがドズルのこの発言は恐らく本心ではあるまい。

これはゲームやアニメとは違い戦争なのだ。

戦争に英雄は居ない、只の殺し合いだ、それを一番分かってるのはこのドズル自身なのだ。

一個人の活躍で戦争が終わるのであればそもそも戦争など発生しないであろう。古代ヨーロッパの騎士よろしく決闘で白黒つけければ良いのだから、

「冗談だ参謀長。一個艦隊沈めた所で意味などないからな、俺が求めてるのは圧倒的勝利だけだ」

「本心からでは無いと思ってましたが安心しました。しかしどうするのですか？現状は極めて不利ですが」

「本国へ行く。行って直接総帥に直談判をしてくる。最終防衛ラインなど知らん、ここソロモンが抜かれたら負ける

。それを理解して貰わねばな」

時間はある。

グリューネマン達参謀部の見込みでは予測される進行日時は12月25日前後、ソロモンから本国サイド3迄は一日もあれば着く、連邦の動きが多少速まったとしても十分対処可能であろう。ソロモンの土気、連度は極めて高く防衛体制に隙は無い、ドズルが多少の間離れても問題は無い

「分かりました。それで出発は？」

「今すぐだ、一秒たりとも無駄には出来ないからな」

事が決まれば迅速に動く、ドズルの真骨頂だ

「コンスコン少将に命じた木馬の追跡は撤回命令を出した、留守の間はコンスコン少将と貴官に任す」

「はっ！」

グリューネマンの返事を聞くやドズルはその巨体を翻らせて素早く扉に急いだ。ラコック大佐は副官である為当然同行する。その二人の背中を見送りながらグリューネマンは思った

―この司令官となら勝てる―

宇宙世紀0079年12月10日

宇宙攻撃軍司令官ドズル・ザビ中將は本国サイド3に向けて一路艦上の人となった。

第3話―ソロモンの悪夢（前編）

宇宙攻撃軍においてドズル中将に次ぐ実力者は誰かと聞かれたら大多数の物はコンスコン少将の名前を上げるであろう。

実質的なナンバー2は参謀長を勤めるグリューネマン少将であるが、選任順と実戦経験の差からグリューネマンはこの宿将を立てる事が多い。

またコンスコンの方もこの知略に溢れる若手の参謀長に敬意を払っている。

宇宙攻撃軍の双壁と言われる両者の関係は極めて良好でありドズル不在のソロモンの統率に不安は無かった。

その両者がお互いの幕僚を連れて高級士官食堂で食事をしている時にその報告は届いた

「ベララベラ管制区に敵影か・・・参謀長はどう見る？」

聞かれたグリューネマンはナフキンで口元のソースを拭いながら答える

「当要塞攻略の為の威力偵察ないし進行ルートの確認でしょうな」

「僕もどう意見である。しかしサラミス型4隻か・・・この程度で偵察に来るとは舐められた物だな。」

「出撃をなさいますか??」

「無論!と言いたい所だが威力偵察であるのならわざわざ相手にこ

こちらの防御態勢を見せる事もあるまい。」

「同感です。しかしこのまま放置するのも考えものかと思われませんか？」

「付近を哨戒中の友軍部隊はいないのか？」

コンスコンに問われた士官が自らの情報端末で確認を取り立体情報として中央に投影した

「302哨戒中隊、ガトー大尉の隊だな」

10万人以上の将兵が所属しているソロモンである為、本来であれば中隊長級の士官など司令部でいちいち名前など性格に把握していない。

無論情報としては司令部にある中央コンピューターに登録してあるのだがそれはあくまでも戦力としての情報でしかなく、たかが一大尉の人となりなど直接の上官でもなければ知るすべも無い。

しかしこのアナベル・ガトー大尉は数少ない例外である

押しも押されぬ宇宙攻撃軍のトップエース。連邦がモビルスーツを全面に押し出してまだ二月程であるが撃墜スコアは既に50機以上、性格の方も沈着冷静かつ勇猛果敢と武人と呼ぶにふさわしい優秀な男でジオン軍人の鑑と迄呼ばれている。

「よろしい、ガトー大尉であれば4隻の巡洋艦くらい何ともないであろう。速やかに攻撃させよ。また念の為付近の哨戒拠点からも援軍を出させよ」

コンスコンの命令は素早く通信士官の手によって302哨戒中隊及

び周囲の友軍に伝えられた。後世においてソロモンの悪夢と呼ばれる事になるアナベル・ガトー大尉の伝説はこの時から始まる事となる。

漆黒の宇宙空間を高速で移動する幾つかの光点がある。

一直線に進まずに蛇行する事で目的地を曖昧にする航法は大海原から大宇宙、レシプロ戦闘機からモビルスーツに変わっても戦闘行動の基本として軍人に広く知られている。

光点の先頭で後続の見方を導くのはYMS14ゲルググ、10月にロールアウトしたばかりの新型機だ。ジェネレーター出力1440KWスラスタ―推力61500Kgと言うその性能はジオンの量産型MSの中では比較の仕様が無い位群を抜いて優れており連邦のガンダムの中でも遜色は無い。本年10月末に先行量産機の25機が完成したきりその生産は遅れに遅れていたが12月に入り生産が軌道に乗った本機の稼働データを取るべく哨戒を兼ねたテストを行って所の出撃命令である。

機体を受領したのは10月末ではあるが初期調整が長引いた所為で実戦で使うのは今回が始めてである。その事が臆病と言言葉とは無縁で剛胆を持って鳴るガトーであつても一抹の不安が拭い切れな
いである要因であつた。

「何を馬鹿な、ジオンの魂を具現した素晴らしい機体では無いか」
「そうは思っても此までの乗機MS09Rリークドムーとは余りにも違いすぎるその操作に慣れて無いのも事実である。」

「私でこれなのだ・・・こうも操縦が複雑では一般の兵は苦勞するな」
事実その操縦性の違いがゲルググの配備を遅らせている一番の原因である。どんなベテランであつても今までの経験が余り通用しなければ機体を思い通りに動かすのは極めて難しい

皮肉な事にゲルググの操縦訓練にに関してだけ言えば先入観を持っていない学徒兵の方が上手くいつている所がある。

だが幾ら操縦方の取得が早くても戦場経験の無い彼らではゲルググの有用性を上手く活用出来ないであろう。

経験豊富なベテランをいち早く戦場に出すために・・・ガトーの行つていた稼働データのテストにはそういった意味も多分に含まれていた。

教育型コンピュータの無いジオンの機体とは言つても稼働データをインストールする事はできる。

ガトーの様なエース級パイロットのデータを機体にインストールする事が出来れば操縦する際の補助となる。そう言つた意味では今回の急な出撃はジオンにとっては好機と言えよう

「全く苦勞するのはいつも私だな」

思わず苦笑してしまう。

「だが、私は義に寄って立っている。私の苦勞だけで他の将兵が助かるのなら喜んで苦勞しようじゃないか」

とそこまで思った時に突然警報音が鳴り響いた。間髪いれずに後続の部下カリウス伍長からの通信が届く。

「大尉！後方より高速で接近する物体が！」

「何！？」

「何時の間に後方に回り込まれた？」

そう戦恐し急いで戦術モニターチェックしたガトーは脱力から安心感こめて嘆息する。

「カリウス識別信号を良くみる、戦場では慌てず冷静でいる事だ」

「えっ・・・あっはい」

「分からののか？、味方だ。これだけ高速で動いてきてるなら一つしかあるまい。モビルアーマーだ」

モビルスーツは地上はともかく宇宙空間では集団行動が前提の機動兵器である。地上と違い重力の無い宇宙空間ではモビルスーツ1機ないし1個小隊程度の活躍で戦況が覆る様な限定された場所というのはあまり存在しない

それ故宇宙空間の戦闘では単機での火力より集団としていかに効率良く火力を集中出来るかが問われる。ジオンはモビルスーツを機動的に運用する事によってその問題を解決した

総合的な火力で連邦に敵わないのであれば素早く火力を特定の箇所に集中できる機動兵器を・・・それがモビルスーツの登場した必然である。

無論ミノフスキー粒子散布下の有視界戦闘において有利と言う理由もあるのだがそれも突き詰めれば火力の集中と言う事に変わらない。敵の懐に飛び込んでモビルスーツによる接近戦を・・・ルウム戦におけるジオンの戦術ドクトリンであるがそれは詰まる所近接火力の集中と言う事である

だが事と次第によつては単機火力の充実が必要な場合がある。要塞等の拠点攻略時がそうであるし強襲作戦を実施する場合に置いても単機火力の充実は必要であろう、それが故のモビルアーマーである。

そして今ガトーの目の前に現れた二本腕をもつ鳥の様な形をした緑色のモビルアーマーはその思想に最も忠実な機体と言われている

4連装ミサイルランチャーを二つに戦艦主砲に匹敵する火力を持つ

メガ粒子砲を装備したその機体は装備した火力に見合う大きさであるが熱核ロケットエンジン2基から出される136100kgと言う恐べき推力により全く鈍重に感じないばかりかその加速力に対抗できる兵器はジオンにも連邦にも存在しない

圧倒的な加速力で接近し圧倒的な火力で敵を殲滅する。単純明快であるが故に強力無比、太古の昔から変わらぬ戦の真理である。I M A105ビグロ― 量産機としてはジオン最強と言うべき機体である

「ガトー、相も変わらず余裕を持った編隊機動だな。実に君らしい華麗な動きだ。」

ビグロから聞こえてきた声は果たしてガトーの予測した通りであった。ケリイ・レズナー大尉、士官学校以来のガトーの盟友であり、その性格も義に篤くガトーと同じく軍人と言うよりは武人と言った方が相応しくあり、パイロットとしても僅か17機しか生産されていないビグロを与えられる程の逸材である。強襲戦闘を得意とする彼にこそこの機体は相応しいと言えよう。

「やはりケリイだったか。世辞はよせ、わざわざそんな事を言う為に此処まで来た訳ではないだろう?」

「無論。このケリイ・レズナー、君の援軍として此処まで来た。最もたかがサラミス型巡洋艦4隻に君が苦戦するとは思えないがね。」

「買い被り過ぎだよケリイ、私でも苦戦はするし指揮を間違っ事も
ある。」

モニターの中のケリイの苦笑を返しながら機体速度をお互い同期させ横に並ぶ、全長45mに及ぶビグロと並ぶといかなゲルググでも

小さく見える。

「だが君の来援には感謝する、轡を並べて共に戦おうではないか。しかし何故此処に？」

今日のケリイは非番の筈だったから当然の疑問である。

「非番とは言え気楽には出来んさ、連邦の本格侵攻が近いのだから一刻でも早く機体に慣れる必要があるからな。君もそうであろう？」

「その通りだ、我々には時間がない。いかに高性能な機体を与えられても使いこなせなければ意味などないからな。そういった意味でがこうやって新型同士での共同作戦を遂行出来るのは僥倖と言えるかもしれないな。」

ケリイとの通信中に別回線より報告が入る。センサーで周囲の警戒を担当しているカリウスからだ。

「大尉、敵の索敵圏内に入ります。まだこちらには気付いていませんが如何いたしますか？」

「よし、カリウス出撃の信号弾を上げよ」

ガトーの言葉はカリウスにとっては常識外の事であった。奇襲が作戦の正否を分けるのに信号弾を上げるなど敵にみすみすこちらの位置を教えるだけでは無いか

「カリウス、お前の考えてる事は分かる。だがこの程度の作戦を遂行出来なくて今後の戦いをどう戦うと言うのだ。我々には大義がある正々堂々と戦い、そして勝とうではないかこの戦いに、構わぬ信

号弾をあげよ！」

カリウス機の肩から信号弾が打ち上がる。その光は天高く駆け登りガトー達を見下ろす遙か高みで弾けた

広がる青い光がガトー達を蒼く染め抜く

青3号弾。我が軍の命運、コノー戦二有り。
奮励を促すジオン共通の発光信号である。

多くの兵がこの光の下で戦ってきた。荒れ狂うルウム海。
ヨーロッパの森林。アフリカの大地で

やがて光は消えた、だが彼らの中ではまだ輝き続けている。
。これから死地に向かう彼らの中でその光は己を奮い立たせる源となろう。

「・・・後は行くのみ！」

ガトーの指示の元、各機が最大戦速で加速する。彼らの熱い信念を機体に託して、遮るものはいない只突き進むのみ

第4話―ソロモンの悪夢（中編）

ガトー率いる302哨戒中隊と連邦小艦隊との戦闘はケリイ搭乗のビッグロから放たれたメガ粒子砲の一撃から始まった。

戦闘距離12000から深淵なる空間に飛び出した暴虐なる光の矢は、狙い違わずに真っ直ぐ一隻のサラミス型巡洋艦に吸い込まれて行くと瞬時に幾人かの生命を蒸発させ又幾人かには逃れ様のない死への宣告を突きつけた。

―この距離で高速機動しながらの初弾命中とは・・・さすがはガトー大尉の盟友と言った所か―

自身も目標として指示された先頭の艦に向かいながらカリウスは素直に感嘆する。

制止状態の目標ならまだしも巡航速度で移動する巡洋艦相手に高速機動する機体の攻撃を命中させるには、自身の速度と相手の攻撃命中時点における予測位置、及び攻撃命中迄のタイムラグ。その全てが頭に入っていないければならない。

複雑な方程式によって導き出されるその全てを理解しても戦場には不確定の事項が多すぎて初弾命中など至難の業だ。

機動速度の違いと言うMS・MAに有利な部分を差し引いても

その技量は恐るべき物と言えよう。そしておそらくケリイはこの複雑怪奇な方程式を頭では無く身体で理解しているのだ。此は何もケリイだけが特別な訳では無くベテランと呼ばれるパイロットなら皆が身につけている物ではあるのだが、1月3日の開戦以来今日まで

およそ一年、その間の人的損失は激しくパイロットの大多数はカリウスと同じく開戦後に補充された者達が占める。それでも連邦のパイロットの比較すれば極めて高い練度を有しているのだが熟練パイロットの絶対数は日々低下している現状だ。

―大尉達だけには苦勞はかけられない―

自身の機体MSI09Rリックドムのスラスタ―を全開に目標との相対距離を瞬時に詰めたカリウスは訓練通り素早くその主武装たるジャイアント・バズを構える。歩兵用のバズ―力を単純に10倍したその火器は砲弾に搭載された炸薬量も相まって命中さえすれば、その当たり所によってはマゼラン型戦艦すら一撃で轟沈せしめる恐るべき破壊力は秘めている。

「目標をセンターに入れてロックオン・・・」

訓練で習ったことが思わず口をついて出る。教官が良く言っていた、落ち着きさえすれば問題ない。戦場では常に冷静でいると。

そうは言っても手が震える。緊張で喉も乾いてくる。そうで無くても自分も敵も双方移動しているのである。巧く照準が合わせられない。

―ええい、ままよ―

半ば盲撃に近い形で放たれた砲弾は宇宙空間の慣性の法則通りに真っ直ぐ目標方向に飛んで行ったのだが碌な照準も合わせていないソ

レはカリウスの願いも虚しくただ艦底を通過していった。

ガトーの見た所カリウスの狙いは悪く無かった。ただ焦り過ぎたのだ。あと少し落ち着いて撃つ事が出来たのなら彼の記念すべき初陣の初弾は忌まわしき連邦の艦に幾ばくかの損害を与え得たであろう。

寸での所で危機を脱出した連邦からの反撃は苛烈な物だった。対空機銃が奏でるのは死への協奏曲、観客はカリウスのリックドム。強圧的な指揮者が振るタクトは観客にも協奏曲への参加を強いてくる、一度観客が取り込まれたならばタクトは益々凶暴となり曲は葬送曲へと様変わりする。

葬送曲の演奏が終わった後残されるのは無理矢理葬送された観客の残滓、それは永久に深い闇の中を漂いながら己の為の鎮魂曲を奏で続ける。

この宇宙は鎮魂曲で満ち溢れている。ラプラス事件より始まった宇宙世紀は開闢以来鎮魂曲が鳴り続けている。この1年で総人口の半数以上の演奏者を得ながらこの鎮魂曲はなおも止まる術を知らない。

無論ガトーは鎮魂曲の演奏者になる気など全く無い。彼が演奏する曲は連邦への葬送曲。戦友との協奏曲。そして勝利の凱歌、これ意外に彼に相応しい曲など存在しまい。

勿論これは彼個人のみならず302哨戒中隊やケリイ・レズナー等部下や戦友問わず彼に関わる全ての人間に適応されるべき物でもある。

行動は早かった、カリウスを狙っていた対空機銃の1基をジオンの量産機としては唯一ゲルググのみが装備しているビームライフルで打ち抜き沈黙させたかと思うと、間髪入れず彼に狙いを定めていた主砲を三点バーストにより跡形も無く粉碎する。更にこの一連の行動の間に距離を詰め接近戦に持ち込む事で対空攻撃を無用の長物とした。

懐に飛び込んだガトーのゲルググに敵艦が成す術は最早無い。

「なんと他愛ない。鎧袖一触とはこの事か」

機体に慣れていないとは言えこの動きである。恐らくはいつもの半分程の力を自分を出せていないだろう。その自分に対してこの体たらくである、せめて一思いに葬るのが武人としての礼儀であろう。

「さらばだ、腐った連邦に属さなければこの様な惨めな思いをする事も無かったであろうな。」

敵に対する餞としては最大の皮肉であろう。そのガトーの思いを代弁するかのように至近距離から放たれたライフルの光軸はサラミス型の主機関部に小さな爆発を生じさせたかと思うと暫し、ほんの一瞬の沈黙の後、艦体を光球と変えた

轟沈

その言葉に相応しい大きな爆発であった。爆発の勢いは艦体を四散させ新たなスペースデブリを無数に作りだした。

勢い良く飛散したかつてのサラミス型であった物の固まりを半自動操縦で回避しながらガトーは次の獲物を探す。少し離れて左後方にはカリウスのリックドムが弾丸の如く飛来するサラミスの怨念を危なかしい動きで避けながらなんとか着いて来ている。

「ガトー来たぞ、連邦のモバイルスーツだ。」

ケリイからの通信が入る。遅時きながら迎撃体制に移行した連邦艦隊からモバイルスーツが繰り出されていた。

サラミス型にモバイルスーツ格納庫は存在しない。ただ艦体の側面の係留されているだけだ。

保守性には難が有る物の緊急時には極めて素早く出撃できる物で、こういった遭遇戦には有用に働く方法であろう。

今回の場合、戦闘開始早々ケリイのビッグロからの攻撃により一隻を失い、更にガトーの攻撃により瞬く間にもう1隻を失った連邦艦隊が此処に来てようやく一矢報いるべき行動に移した所と言えよう。

戦術モニターに新たに追加された光点は8つ、連邦の機体情報には乏しい為、出撃してきた機種迄はさすがに判別しない

こちらは302哨戒中隊の9機にケリイのビッグロを併せて計10機、

対して連邦が巡洋艦2隻に艦載機が8。戦力はほぼ互角と言えよう。

戦闘開始より3分。戦場は混戦の態を成してきていた。

第4話―ソロモンの悪夢（中編）（後書き）

現状ではドズル無双ってよりガトー無双ですねww

第5話―ソロモンの悪夢（後編）

ジオン公国のモビルスーツ中隊は基本的に3単位編成になっている。すなわち指揮、主攻、助攻の役割を各小隊が担い。小隊編成も此に準じる為、一個小隊は3機で編成される。一個中隊は3個小隊でモビルスーツ9機で編成されるのが基本である。無論これらは各部隊の任務、特性、指揮官の性質により変化し一個小隊が2機の時もあるし4機で編成される場合もあるが概ね3単位編成がその大半を占めている。

連邦軍の場合は指揮、主攻、助攻と言う役割は変わらないが此に加え支援と言う役割が加わり一個小隊は4機編成となる。中隊が3個小隊編成と言う所はジオンと変わらないので一個中隊がモビルスーツ12機で編成されジオンより数が多い。

正面戦力で見た場合、一見数の多い連邦軍が有利と見えるが宇宙世紀0079年12月現在全てがモビルスーツで編成されるジオンのモビルスーツ中隊とは異なり、連邦軍の場合は支援と助攻を担う2機はモビルスーツでは無く作業ポッドを改造した簡易戦闘ポッドのRB-79ボールで構成されてる事が多い。

この機体は生産性と操縦の容易差だけが取り柄の劣悪な機体であり、兵器と呼ぶには些か難があるのだがいかに物資、資源な豊富な連邦軍と言えど開戦初期の攻撃より大損害を受けた北米、欧州の重工業地帯の復興も俟ならぬ現状においては生産性に優れるこの機体の生産を止めれば宇宙空間においてモビルスーツに対抗できる機体の絶対数を失うだけである。

動く棺桶とも揶揄されるこの機体を嫌い宙間戦闘機FFI-S3セイ

バーフィッシュに乗る事を選ぶ物もいるのだが一部の技量が卓越した優秀な者以外は開戦以来増え続ける哀れな戦死者のリストに新たに名を連ねるだけである。

ガトー率いる302哨戒中隊と対峙した連邦軍の2個小隊もその例に漏れずその半数はこの戦闘ポッドで編成されていた。

「敵、機種確認。丸形4つ人型4つ。人型の内一機は頭部とシールドに他機との差違あり。指揮官機だな」

センサーの有効範囲の広いビッグロに乗っているケリイから通信が入る。ガトーは手元のコンソールを叩くとサブモニターに最大望遠で写し出した敵の姿をコンピュータに寄るグラフィック補正交えつつを表示させる。

「ジム・コマンドと言ったかな確か」

映し出された敵機の姿を見てガトーが呟く。先日の士官パイロットを対象とした会議で見た資料に載っていた機体である。

簡易量産で作られたRGM-79ジムと違いRGM-79Sジム・コマンドはそのコマンドと言う名前が示す通り指揮官用が開発されたとも言われる機体で特に宇宙戦用に改良されたS型は高い軌道性を有する為に注意せよとリュッケ大佐が言ったのを思い出した。

「だが・・・所詮は素人！」

大破したサラミス型の陰から踊り出して来たのはこの乱戦の中では戦術的判断として間違いない。だがそれは余りにも当たり前の行動でもあった。常道だからこそ対処しやすい。連邦同士の訓練では通

用しても経験豊富なジオン兵相手の場合不意打ちには生り得ない。

ゲルググの足を前へ振り出しその反動で姿勢を変える。既にライフルの照準は敵捉えていた。ロックオンを告げる電子音がコクピットに鳴り響くと同時にライフルを射出する

ほんの一瞬の後ジム・コマンドは光球と化す。敵を補足してからこの間僅かに3秒。余りにも早い行動と言えた。ジム・コマンドのパイロットは恐らく自分の死すら認識できずに霧散してしまったのであろう。

アンバック
AMBAC機動。ガトーの行ったのは人型モビルスーツのみに許された反動姿勢制御だ。宙間戦闘と基本と言えるがこும்巧くAMBACを使いこなすのはジオンに勇者多しとも言えどもガトーしかない赤い彗星シャア・アズナブル大佐の得意とする所は高速機動戦闘であるし、真紅の稲妻ジョニー・ライデン少佐も射撃に特化してる物の本質は高速機動戦闘だ。白狼シン・マツナガ大尉は格闘戦であるしエース部隊と名高いキマイラ隊の面々はその大半が強襲戦闘を得意としている。

AMBAC機動の本質は反動を利用する事により敵に未来位置を読ませない事である為、その戦闘方は乱戦である程有利に働く。目の前に居た筈が反動を利用して一瞬の内に位置を入れ替える為、敵からしたらまるで瞬間移動したかの様に錯覚するのである。また推進剤の節約にもなり継戦能力も高まる為、ガトーは自ら率いる302哨戒中隊にこの戦闘方を習熟させていた。高速機動戦闘は一見華やかであるがパイロットの身体に負担を強いる為、完璧な技量で修得するには相応の時間がかかる。

AMBAC機動の場合、宙間戦闘の基本と位置づけられてる為修得その物に困難はない。ガトー程卓越した物は数少ないが戦闘行動を

行うのに不都合が無いレベル迄の修得なら容易である為問題無い。

学徒も動員されつつあるジオン公国の現状では短期間で最大の効果を上げれるAMBAC機動による戦闘方の修得はその有無によって戦争の行方すら左右しかねない問題なのである。

その点において302哨戒中隊の隊員に問題は無い。

不用意に接近戦を挑まず、かつ離れすぎず適正な距離を保ったままで敵を攪乱している。

見ればカリウスのドムが放ったジャイアント・バズが丁度一機の丸形に命中する所だった。いかに初陣の新兵といえどもモビルスーツが戦闘ポッド如きに遅れを取る事はない。戦場で立ち止まる等と言う素人染みた行動をしない限りは初速の遅いボールの180ミリキヤノンによって撃墜される事はあり得ない

戦闘は302哨戒中隊有利に進んでいる。敵機は既にモビルスーツ2機と戦闘ポッド1機まで数を減らし一カ所に密集している。それに対しガトー達が扇型に包囲隊形をとりながら攻撃を繰り返している。破壊されたサラミスの陰に隠れながら必死に防戦に努めているが全滅するのは時間の問題であろう。その横ではサラミス型をさらに一隻葬ったケリーのビグロが残る一隻のサラミスに対しは機動戦闘を仕掛けていた。

サラミスにまともに応戦できる対空火器は最早無く、僅かばかり残った主砲が必死の抵抗を試みてはいるが、その主砲の死角とも言わべき上方向からの攻撃に対しては成す術も無い現状となっていた。

「勝つたな」

丁度ガトーの横を駆け抜けて行ったケリーのビグロから簡単な言葉で通信が入る。

敵艦に対して攻撃を仕掛けているパイロットが通信を送れる程ガトー達には余裕があった。

「ああ。腐った連邦など矢張我々の敵では無かったと言う事だ」

大破したサラミス型の巨大な艦体に隠れる敵のモビルスーツに照準を付けたままガトーは答える。

機体の振動で小刻みに動く照準を修正しつつ、敵機がいる座標を少し避けた位置を目標にライフルで打ち抜く。

ライフルの着弾に驚き、身を潜めていた場所から慌てる様に飛び出したジムは僅かに遅れて発射された二発目の直撃を受け刹那の、ほんの刹那の沈黙の後、中のパイロットと共に宇宙の塵となった。動力部たる核融合炉への直撃だった為その死骸は肉片の一つ、血の一滴すら残さずに消滅したであろう。

時を同じくしてケリーの対峙していたサラミスにも最後の時が来ていた。艦体の各所には攻撃で生じた火球が見える。既に動く物は無くその様は古の伝承に出てくる幽霊船の態をなしている様だ。既に指揮官は艦の廃棄を決めたのである。艦体後方からは脱出用とおぼしき内火艇が出ている。

その敗残兵の集団に一機のモビルスーツが攻撃を仕掛けようとしていた。カリウスのリックドムだ

「辞めるカリウス！敗残兵に手をかける必要はない。」

「しかし大尉。連邦など生かしておいては・・・」

「愚か者が！貴様このアナベル・ガトーを卑怯者と呼ばせたいのか！連邦憎しと言えど戦士が戦うのは戦場でのみ。戦いに破れ逃げて行く者に追い打ちを架けるなど、私の矜持にかけて断じて認めん。」

「退け！」

ガトーの怒号を浴びカリウスのリックドムは引いて行く。

カリウスに悪気が無いのはガトーとて分かっている。初陣で高揚した気持ちにより一層の戦果拡張に走らせただけだ。新兵にはよくある事で自分にも身に覚えが無い訳でもない

だがガトーは思う。戦いの中で死んでいくのは仕方ない。戦士である以上敵にも覚悟はあろう。だが殺し殺させるのは戦場だけでは十分では無いか。討たれたから討つて、討つたから討たれる。それを繰り返しては憎しみの連鎖が続くだけだ。今次大戦の目的はスペースノイドの自治権拡大であるが其れさえ果たせるなら無用の憎しみは買うべきではないと思う。戦いは大儀があるからこそ崇高で尊い。総力戦の態をなして来た泥沼の今だからこそ、それを忘れるべきでは無いのだ。

無論、感情の全てを否定する物では無い。連邦に家族を恋人を殺された物は多く居よう。其れが力になるのも事実だ。だが其れは連邦も同じでありその果てない憎しみの連鎖に捕らわれてしまったら次に待つのは「死」だけなのだ。そうなれば最早戦士呼べないのではないか？いつ戦場で死ぬか分からない身であるからこそ常に自分とその周りの人間達位は戦士であり続けたいと思う。

「ガトー。敵の逃げていく方向に新たな敵陰が見えるがどうする？」

ほぼ周囲の敵を一掃し周囲の哨戒を担っていたケリイからの通信が届く。恐らく戦闘開始時に周囲の友軍に出した援軍要請が届いたのであろう。戦闘開始から10分での到着は極めて速いと言えるが、この場合は遅きに失したのは否め無い。ガトー達による勝利が余りにも速すぎた為、連邦は敗残兵の收容を優先すると言う予想外の事

態に戸惑っている様だ。

この機に際しガトーは攻撃の手を休め様子を見る事にする

敗残兵を收容し撤退するなら良し。抵抗するなら殲滅するだけである。ケリーのビッグロを左翼後方に下げその前に302哨戒中隊はガトーを先頭に凸型陣形で布陣し連邦の出方を待つ事にする。

15分後だった。敗残兵を收容したコロンブス型輸送艦は反転撤退しそれを見守った連邦はマゼラン型戦艦を中心に前進してきた。恐らく旗艦であろうマゼランの周囲は7隻のサラミス型が騎士に従う従者の如く輪型陣を組み守りを固めている。従者の持つ槍の役割を担うモビルスーツは4個小隊16機を数える。連邦のモビルスーツ編成の例に漏れず半数の8機はボールとは言え、一個中隊が相手するには本来なら多勢に無勢と言える。そしてそれは連邦の指揮官も思った事であろう。先に撃滅された小艦隊の仇を取るべく過剰とも言える戦力を前進させて来たのである

距離16000からの射撃はモビルスーツを目標とするには狙いが粗すぎたが戦闘開始を告げる点鐘とするには充分だった。7隻の巡洋艦と1隻の戦艦から発射された幾数もの光軸は漆黒の宇宙空間を貫きガトー達に光の洗礼を浴びせる。目標座標がずれている為大した回避行動を取る必要は無かった。続いて二斉射、三斉射と発射されるがそのどれもガトー達の驚異とは成らない。

「中隊長より全機。各機陣型は保つたまま距離を積める。隙を見て一気に中心に突撃をかける。ケリイは左翼より大きく迂回しつつ遠距離からの砲撃による陽道を頼む。」

モビルアーマーを利用しての挟撃作戦とも言えるが僅か一個中隊9機で敵のただ中に突撃するのは本来であれば無謀な作戦である。火力の絶対量が違う敵への突撃など自殺行為でしかない。が302哨戒中隊員の中隊長たるガトーへの信頼は高い。ガトー本人が極めて優秀な搭乗員である事もあるが彼がこれまで一度たりとも僚機を失った事が無いと言う事実が安心感、信頼感を抱かせるのである。その実績が端から見ると無謀な作戦にでも黙って部下が従うと言う救心力と成り得ているのだ。

ジオンに兵ありと言えども部下に対し此処までの信頼感を抱かせる事の出きる者はそうは居ない。
優将。良将。猛将。名将。将に対する呼称は色々あるが部下に無敗の信仰を抱かせる者は英雄と言う。
戦場に英雄は居ないと言うがアナベル・ガトー。彼は間違い無く英雄であった。

その英雄の行進が始まった。
陽道のケリイが放ったメガ粒子砲の三斉射に敵が気を取られたその一瞬の隙を付いて一気に距離を縮めた。

2番機3番機を勤めるリックドムが120ミリマシンガンで弾幕を張り敵の気を引く。4番機以下9番機のカリウス迄の6機は小さく蛇行しながらも高速で進むガトーの真後ろに左右二列に分かれて付く。凸型陣型が型に編成し直された形だ。

三角形の頂点で進むガトーのゲルググは敵先鋒とも言つべき一個モビルスーツ小隊に近づくと背中 of ビームナギナタを手に取った。素早くビームの粒子が柄の先端と最後部に幅広の刃を形成する。その刃は連邦兵を死に誘うかの様に赤く妖しく輝いている。後方に従う部下達の攻撃、弾幕により左右の逃げ場を塞がれた敵は果敢にも前進してきた。

「ほう。連邦にしては度胸がいい。だが・・・！」

フットペダルを踏み込み距離を積みナギナタを横に払う。僅かの間も無く両断され巻きあがる爆発と閃光。余りの早さに一瞬動きの止まった敵を見逃す程ガトーは甘くない。

ナギナタの刃が宙も舞う度に一機、また一機と血祭りになって行く。爆発を免れ宙を漂う機体から漏れるオイルが戦場を染めあげる。肉塊が鉄の塊に血がオイルに変わろうとも古来から変わらぬ凄惨な殺戮の場が瞬時に出来あがる。

殺戮の時間は終わらない。先鋒が全滅したのを見た残る3個小隊が広く展開しながら包囲を狭めてきた。

近距離戦で全滅したのを見た後であるから戦術的判断は正しいが相手が悪すぎた。広く展開した事は連邦お得意の相互支援体型を放棄する事になる。矢張りそれを見逃すガトーではなかった。

「マウセン。ビュロー。丸形をこの位置から狙撃しろ」

左右を固める2番機3番機のパイロットである。共にガトーにその狙撃の腕を認められている。

ガトーの指示が下ると二人はマシンガンをオート連写にし一機つつ確実に撃滅していく。多少の距離があるとは言え脆弱な装甲しか持

たない上相互支援体型を放棄し弾幕すら張れないボールには迫りくる死に抗う術など無かった。一機また一機つつ確実に黄泉の舞台へと旅だつて行った

瞬くまにボールを殲滅された適に動揺が走った。お互いの出方を伺う様にその場で止まってしまったのだ。

「戦場で立ち止まるとは素人か！」

ガトーの怒号に呼応するかの様にゲルググはまたもナギナタを払う。最初の切り払いで一機のジムは肩の辺りから袈裟斬りにされて上半身が爆発し四散した。次の一撃を横にいたジムののこクピット周辺に突き刺し中のパイロットを蒸発させるとゲルググの脚で振り抜き宇宙の深淵へと蹴りやると、そのAMBAC機動の勢いで3機目のジムに肩から体当たりをし体制を崩し、その隙を見逃さずゼロ距離からビームライフルで動力炉打ち抜いた。

3機目のジムから発せられた核爆発は周囲の残骸を焼き付くした頃には動いてるジムの姿はもうなかった。

残る敵艦隊が近づいてきた為対空放火は苛烈であったが勝利は最早疑い様ない。モビルスーツを持たない艦隊がどれほど惨めかは此までの1年弱の戦いが証明している。

「俺の助太刀はいらなかったかな」

「いや、こつも圧倒的に勝てたのは君の援軍があればだよケリイ」

「謙遜するなガトー。君こそジオンの英雄だ。」

「言い過ぎよケリイ。まあ君からの言葉だ、喜んで受け取っておこ

う。」

サラミスの一隻に対艦ミサイルを放ちながら短距離通信で届くケリの声にガトーもサラミス型的に的確にライフルの射撃を当てながら答える。

旗艦と思わしきマゼランはビュローとカリウスの攻撃により満身創痍となりながら既に後退の準備を始めている。残る数隻のサラミスが撃沈するか後退して行くのも時間の問題であろう。ベラバラ沖遭遇戦。後にそう名付けられる戦いはこうして幕を閉じようとしていた。

臨時作戦本部となっていた士官食堂は歓喜の嵐に包まれていた。僅か一個中隊9機のモビルスーツ隊がモビルアーマーの支援を受けてたとは言え多大な戦果を上げたのだ

撃破した敵モビルスーツは戦闘ポッドを含むとは言え20機以上、撃沈した敵艦船は実にサラミス型9隻。

「やれやれ、敵に新たに援軍が現れた時はどうしようかと思っただぞ」
額の汗を拭きながらコンスコンが言う

「恐ろしきはガトー大尉といった所でしような。こちらも援軍の手配をしていたのにその到着の前に決着をつけるとは……」

「参謀長の言う通りであるな。ガトーの大尉の存在は連邦にとって正に悪夢と言えよう。」

「ソロモンの悪夢ですか・・・このような兵がいる限り我がジオンに敗北はありませんな」

宇宙世紀0079 12月12日

ジオン公国宇宙攻撃軍所属アナベル・ガトー大尉。この日よりソロモンの悪夢と呼ばれる事になる

第6話―蜂遊は宇宙に舞う(前書き)

遅筆でマジすいません

第6話―蜉蝣は宇宙に舞う

妖艶と呼ぶに相応しいその美貌は、均整のとれたプロポーション、素早い身のこなしと併せて見る人に雌豹の如く印象を与える。

それが突撃機動軍海兵隊司令代理シーマ・ガラハウ少佐を、一目見た際に感じる印象である。

幾多の死線を潜り抜けてたその毅然とした姿は、常に恐れる事を知らず、部下からは絶対の忠誠と信頼を抱かれている。女傑と呼ぶに相応しいシーマをもつてしても、此の二日程の事態は戸惑う事ばかりだ。

ア・バオア・クー宙域を航行中に、数隻のムサイが接近して来たかと思うと、本国迄の先導を依頼されたのだ。

他国者でも無いのに何を先導する必要が有る。そう重い断ろうとしたシーマが、通信スクリーンの中に見たのは宇宙攻撃軍司令ドズル・ザビその人であった。

管轄の違う突撃機動軍所属とは言え、将官であり、国家の重鎮でもあるドズルからの依頼を断る事は、少佐に過ぎないシーマには難しい事だった。

結局、上級司令部へ確認をとる暇も無く、流れの儘に本国への水先案内人を勤める事になってしまったのだ。

自ら先導を望んだにも関わらず、ドズルの艦隊は、シーマ達海兵の遙か後方の通信を取る事すら難しい。

まるで自分達が監視されてる様だ。そんな気持ちを抱きながら此まで二日の航海を続けている状況である。

本国サイド3宙域に入っすすぐの事だった。

「前方よりチベ級一隻当艦に接近中。親衛隊の連中と思われませう。」
副長を勤めるデトローフ・コッセル大尉が、その張りの有る声をあげる。見た目は軍人と言うよりマフィアの幹部とも言つべき彼だが、その報告は常に簡潔、正確な物でありシーマの信頼は篤い。

「艦種判明。親衛隊のバルバロッサです。」

「バルバロッサより入電。停船せよ然らざれば攻撃す、繰り返す、停船せよ然らざれば攻撃す。」

航海士と通信士の報告に艦橋の全乗組員が気色ばんだ。停船せよ然らざれば攻撃す。古くからの慣習に基づいた、停船指示の常套句ではあるが、敵対国ないし中立国艦船へ送るべき通信文であり、間違つても友軍に送るべき物では無い。

「シーマ様。親衛隊の連中俺らが海兵だからって馬鹿にしていますぜ。このまま言わせておいて良いんですかい？」

コッセルの言葉に数秒シーマは逡巡する。いかな海兵と言えど本国に近いこの宙域での問題はまずい。
だがこつとも思う。所詮嫌われ者の海兵である。今更問題行動の一つや二つ増えた所で関係あるまい。

頬に打ち付けていた指揮棒代わりの扇子の動きを止め、シーマは立ち上がる。全員の視線が集中する中、凜とした声を張り上げた。

「バルバロッサに対し主砲一斉射。後続の各艦は本艦斉射後、目標座標を3度ずらし砲撃。海兵の力を本国のお人形さんに見せてやりな！」

歓声に包まれる艦橋。コッセルが命令を復唱し後続の4隻にも通信が送られる。

「いいかい、間違っても当てるんじゃないよ。ビビって貰えば充分だ。」

「うちの砲撃手は優秀だから心配には及びませんぜ。しかしシーマ様、本当に宜しいので？」

「心配する事はない、責任は私が取る。バカにされて黙ってられる程このシーマ・ガラハウ、人間出来て無いよ。」

不適に笑うシーマを見てコッセルは頷く。

「それに今回は、後ろにお偉いさんが付いて来てるからねえ。ザビ家の看板利用させて貰うよ。」

立ち上がり、腕を前に突き出すと同時にリリーマルレーンの主砲は発射された。虚空を貫き、バルバロッサの右脇を掠めると同時に、後続の四艦から発射されたエネルギーの粒子が左脇を掠める。

初弾からの挟差。本来なら容易に出来ない技術である。ジオン海兵隊、その評判にそぐわない屈強な兵の集まりである。

さすがに応射は無かった。有ったのはヒステリックな通信である。

「これはどういう事か！こっちは味方だぞ。」

通信スクリーンに写った神経質そうな顔の士官が金切り声を上げる。シーマは内心の愉快的な気持ちを表には出さず、澄ました顔を作り返答した。

「味方だったかい。それは失礼した。停船せねば砲撃すると言われた物でねえ……敵だと誤認したよ。」

「こんな所に敵なんかいるか！貴官等は親衛隊を舐めているのか！」

「変な事を言うねえ。敵がない宙域なら停船信号など必要無いのでは無いのかい？こちらは常に臨戦態勢故、悠長な事はしてられないんだよ。」

的を得たシーマの言葉に、通信スクリーンの相手が黙る。苦虫を踏みつぶしたその顔は、シーマを睨んだかと思うと姿を消した。その様子を相手側に見えない所に陣取っているコッセルを始め、艦橋にいる全員が、口元に笑いを浮かべながら成り行きを見守っている。

通信スクリーンは一瞬ノイズが走り、その次の瞬間には、ブロンドの髪を持つ若い女性士官が写し出された。総帥府直属を示す赤い軍服にはシーマと同じ少佐の階級章が見える。

「本艦の艦長を勤める総帥府のクワサン・オリビーである。今回の件はどうした事か？」

「はっ、突然臨検指示を受けましたので、敵だと判断し攻撃を致し

ました。」

同じ少佐とは言え、総帥府直属士官は2階級上の扱いを受ける為、シーマは先ほどと違い敬語を以て答える。

「此処は本国である。敵から攻撃をつける筈など有るまい。」

先程と同じ問答の繰り返しである。辟易としながらも慥然とした表情でシーマは続ける。

「ソロモン迄敵が迫ってる以上は、本国といえど安穩とした状況では無いと判断致しました。」

「そんな訳は無かるう。この宙域の守りは完璧である。」

「前線勤務ばかりで多忙故、本国の情報迄は分かりかねます。クワサン殿は、我ら海兵が故意に撃ったとおっしゃる訳か??」

「違つとでも?」

「ならば、作戦行動中の我ら海兵の行動を、妨害した理由をクワサン殿にご教示願いたい。」

「小煩さい小便ガキだねえ。総帥の肉便器如きが調子に乗るんじゃないよー」

内心の苛立ちは隠し軍人らしい態度でシーマは返答を続ける。

「サイド3宙域に近づく艦船は、事前に総帥府への連絡義務がある。その連絡が無い故、職務に従ったに過ぎない。」

「ほう……総帥府も地に落ちましたな。」

シーマの発言にクワサンの眉がっり上がる。

「無礼であろうシーマ少佐！総帥府を侮辱する事はギレン総帥を侮辱する事であるぞ！そこへ直れい。私自ら貴様を修正してくれる。」

怒声がスクリーン越しにリリマルレーンの、ブリッジに響きわたる。萎縮する物はいない。自らの力に因らない権威など、シーマ達が最も唾棄すべき物だ。

「小便臭い小娘がこのシーマ様に逆らおうつてのかい？いいよ。逃げはしないからかかって来な！」

相手の発した怒声とは違い、落ち着いた声色であるが、その凄みは相手を萎縮させるのに充分過ぎた。シーマは更に言葉を続ける。

「本国でのうのと暮らしてるだけの奴らに舐められる程、このシーマ・ガラハウ落ちてないよ。海兵の戦い方をあんたに教えて上げるよ。」

コッセルと目が合う。無言でシーマは頷く。

間髪入れず発射されたメガ粒子砲は、制止状態のバルバツロサの左翼を掠めた。直撃こそしなかったが至近距離である。外部にむき出しになっていた対空砲の何基かは、熱と衝撃で使用不能になっているだろう。

「今のはお情けだよ。そこをどきな、我ら海兵はドズル閣下の案内の為、此処にいるんだから。」

ドズルと言う単語にクワサンは眉を潜めた。

「ドズル閣下だと？」

「知らなかったのかい？報告はきちんとして行ってる筈だよ。あんたら
どんだけ平和ボケしてるんだい。」

露骨に焦り顔は浮かべなかった物のクワサンは、一旦通信を打ち切る。待つてる間のリリマルレーンには、呆れとも諦めともつかない空気が流れる。この戦時にこの体たらく！誰もが言葉を発しない物の考えてる事は同じである。

本国のこんな奴らの為に私は前線で戦ってるのか……

シーマの心に絶望と不信が広がる。開戦のあの日、サイド2に毒ガスを注入して以来、拭う事の出来ない絶望と不信。深い闇に捕らわれた心。考えまいとしても、本国の墮落した様を見せつけられたその心は、より一層深い闇が覆う。

もうどうだっていいさ。ジオンが勝とうが負けようが、私は私で好きにやらせて貰うさ。私に付いてきてくれる馬鹿共も食わせないとダメだしね。

リリマルレーンの艦橋を見渡す。そのどれもが軍人とは呼べない様な者達ばかりだ。開戦前は実際に刑務所に入ってた者だっている。規律に縛られない自由な集団。そう呼べば聞こえは良いが、実際はならず者の集まりである。

だが彼らは間違いなく家族以上の存在だ。開戦以来常に最前線で苦労以上の苦労を共にしてきたその絆は、何よりも深く、その血は誰

よりも濃い。

多くが傷つき、多くが倒れ、幾多の仲間を失った。それでも自分を慕い笑顔で戦ってくれる。

なればこそシーマは思う。戦争の行方は別にして彼らを楽しませてやりたいと。

「シーマ様。ドズル様からの通信です。」

述懐は通信士からの報告で止まった。ようやくミノフスキー粒子の濃度が、遙か後方を行くドズルとの通信が出来る迄に薄くなったのだ。

「よし回せ。」

シートに身を沈め襟を正す。後方から騒ぎが見えてたかは分からないが、バルバロッサの通信が打ち切られてから10分だ。おそらく既にドズルの元へ報告は届いてるだろう、シーマは叱責を覚悟した。

「やってくれたなシーマ少佐。」

シーマは戸惑う。その言葉とは裏腹に、ドズルの顔が嬉しそうに笑って見えるのだ。

「申し訳ありません。どのような罰でもお受けします。」

親衛隊所属の艦船を挑発した挙げ句、攻撃を加えてしまったのだ。臨検に対処したと言いつの出来る一回めはまだしも、二回目に関しては、いかにドズルの名を出そうとも何らかの処罰は免れまい。

だが、それならそれで軍を抜けるだけさ

シーマはそう思う。軍に絶望してる彼女にとってはその方が都合が良いのかも知れない。この場で撃ち合いになろうとも数は海兵隊の方が多いので脱出は容易である。

「責めてはおらん。シーマ少佐。貴官は親衛隊のバルバロッサと合同訓練を行った。そうであろう??」

「……閣下？」

「そういう事にしておくのだ。実はな少佐、俺も総帥府の連中はどうにも好かん。」

そう言い笑みを浮かべる。獰猛な獣の様な印象の強いドズルであるが、その笑顔は意外と幼くあどけなく見える。

餓鬼大勝が悪戯をして見つかった時の様な笑顔。そんな印象をシーマは受けた。国家の重鎮としてのドズルは厳しい軍人かも知れないが、本質的には海兵の男達に近いのかも知れない。そう思うと不思議とシーマも笑みがこぼれる。

「これは驚いた。海兵のシーマ・ガラハウもそんな笑みを浮かべるのだな。これは良いものを見た。」

ドズルの言葉に艦橋が沸いた。シーマは柄にもなく赤面してしまうが、皆がこうやって笑うのは久しく無かった気がする。

「ドズル閣下あきませんぜ。閣下にはゼナ様がいらっしやるんですから。」

コッセルの言葉に再び歓声が沸く。さすがに不味いとシーマは思ったが、ドズルも別段怒る訳でも無く豪快な笑いを浮かべている。これがドズル・ザビと言う人か……
シーマは感嘆する。威厳に溢れながらも偉ぶる所が全くない。僅か数分の間には権威と言う物に、条件的反射的反骨心を抱いている海兵達の心も捉えてしまった。

アサクラでは無くドズル閣下の元で戦っていたのなら……
名目上の海兵司令アサクラ大佐の小太りした姿を思い出し、鬱然としたシーマにドズルは彼女の運命を決定付ける一言を放った。

「良い男達だな。どうだ少佐、物は相談だがソロモンへ来ぬか？」

「……は？」

想像だにしない言葉に虚を付かれ、思わず愚鈍な返事をしてしまう。だがその中で彼女は確かに感じていた。
絶望と不信しかない中に差し込む一条の光を、その光に導かれるままに戦ってみるのも悪くない気がする。

高貴な獣の意を受け、蛹より蜉蝣かげろうは生まれる。

光の赴くままに蜉蝣はソロモンの海に舞う。

シーマ・ガラハウ

ジオンの暗黒面を見てきた彼女に光は今差し込む。

第6話―蜉蝣は宇宙に舞う（後書き）

一個だけネタを仕込んで置きましたがわかりますか？

ちよつと修正

親衛隊のバルバロッサをザンジバルからチベ級に変更

ちよつと調べたらPCゲーム版にチベ級として実際に存在するんだ
よね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2711u/>

宇宙の墓標ーソロモン会戦記ー

2011年10月8日01時51分発行